

ターミナル期にあるがん患者に関わる看護師のケア態度

著者	渡邊 清江
発行年	2014-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10422/7331

氏 名	渡邊 清江
学位の種類	修 士 (看護学)
学位記番号	修 士 第 1 6 9 号
学位授与年月日	平成26年3月10日
学位論文題目	ターミナル期にあるがん患者に関わる看護師のケア 態度

論文内容要旨

※整理番号	174	(ふりがな) 氏 名	わたなべ きよえ 渡邊 清江
修士論文題目	ターミナル期にあるがん患者に関わる看護師のケア態度		
<p>【研究の目的】</p> <p>日本では、医学の進歩や核家族化が進み、死亡する場所が、家庭から病院・施設へと変化している。看取りの経験や死について考える機会が少ないまま、看護師は病院で死にゆく人へのケアを行わなければならない。死にゆく人と、死について話す事は、看護師にとってストレスであり、死の受け止め方によっては、バーンアウトに至ることも少なくないと言われている。ターミナルケアに携わる看護師の精神的負担は大きく、患者に対する看護師の関わり方には、看護師自身の死生観や看護観が、患者へのケアの質に影響を及ぼすと考えられる。看護師のケアへの考えや感情はケア行動を起こすきっかけとなるため、その考えや感情を看護師自身が認識し、ケアを提供することは看護の質を高めるためには重要である。そこで、看護師のケアへの感情や考えに影響する死生観や個人特性の要因を明らかにし、死生観育成の内容や教育の示唆を得ることで、ケアの質の向上につながることを目的とした。</p> <p>【方法】</p> <p>調査内容は、看護師の基本属性、臨老式死生観尺度、Rosenberg 自尊感情尺度、認知判断傾向として認知的熟慮性—衝動性尺度、看護師のケアへの感情や考えをケア態度として判断するFATCOD-B-Jである。対象は死を意識しやすいがん患者に関わる看護師に注目し、近畿圏内のがん拠点病院に勤務する看護師である。FATCOD-B-Jを従属変数とし、基本属性、死生観、自尊感情、認知判断傾向を独立変数として、影響因子を明らかにするために重回帰分析を行った。</p> <p>【結果・考察】</p> <p>患者へのケアの前向きな感情や考えを持つ看護師の要因として、ターミナル期のがん患者と関わった人数が多く、緩和ケア・がん看護の研修に参加しており、自尊感情が高い看護師であった。また、死生観では、死の回避、人生における目的意識が要因であった。年齢や性別は関係がなかったため、幅広い対象の看護師に、死について考える機会を提供し、看護師としての使命や意義を見だし、看護専門職としての自尊感情を高められるような研修が効果的であることが示唆された。患者・家族へのケアを認識している看護師の要因として、血縁高齢者が身近に存在すること、認知判断傾向として、物事をじっくり考える傾向であることであった。死生観の因子としては、患者へのケアの前向きな感情や考えを持つ看護師と同様に、死について避けることがなく、人生に目的や意義を見いだしていることであった。物事をじっくり考え判断することが、患者・家族へのケアの認識につながり、患者への前向きな感情と同様に、死について避けることなく考えを深め、人生における目的や意義を見いだせるようになれば、家族を含めたケアの質の向上に繋がることを示唆された。</p> <p>【総括】</p> <p>ターミナル期のがん患者と関わる看護師のケアへの考えや感情が前向きになる要因として、死を肯定的に捉えている人生における目的意識は正の因子として、否定的に捉えている死への回避は負の因子として有意であり、死生観の教育内容としての要点が明確になったと思われる。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。